タシロとマリッツァが恋に落ちたのはいつか

情報工学科２年　船戸伸幸

　このオペラを見て疑問に思ったことは、マリッツァ伯爵令嬢とタシロ伯爵がいつ互いに気になり始めたかということである。２幕を見ると互いに「もし」と言いながらも、確かな好意を持っていることがわかる。幕と幕の間でその過程が省略されるということはないだろうという考えから、1 幕の中にあると考えた。
1 幕最初でのタシロのマリッツァに対する印象はこの土地のことを全て自分の裁量で決めさせてもらえると言っており、それに対しマリッツァは実際に会うこともせず、書類の文字だけで採用していて興味がないようだった。
まずタシロがどの場面からマリッツァに興味を持ち始めたかを考えていこうと思う。初めに注目したのはコローマン・ジュパンとマリッツァが 2 重唱をしている場面である。ここでは歌の終盤にタシロが窓の外からその光景を見て残念そうな顔をして去っていく。つまりこの時点ですでにマリッツァに対する何らかの感情は生まれ始めていたのだろう。そのためこの場面より前にさかのぼってそのきっかけを探していきたい。それ以前の場面でタシロが出てくるのはマリッツァが帰ってきた時とリーザと話している場面である。初対面の時は、作中でマリッツァは美人であると言われているし、第一印象も良かったであろうが、言い争いになってしまう。その後、タシロがリーザに管理人をしているのが恋の策略だと言われた時に、無意識かもしれないが気になりだしていたのではないかと思った。そして先ほどの 2 重唱の場面は他人といるマリッツァを見て嫉妬していたのだろうと結論づけた。
次にマリッツァについて考えていきたい。タシロに対する感情が変わるとすれば、おそらく彼の歌を聞いてからだろう。そこでマリッツァは再度歌うように命令するが拒否され、癇癪を起こしてしまう。このことからマリッツァは今まで他人が自分より下にいるような生活をしてきたのだろうと考えられる。その中で突然自分の言う事を聞かない人が出てくれば気になってしまうだろうと考えた。ここでタシロが再度歌うことを拒否するというのは、本編でチェッコが「管理人さんどうしたのかねえ」と言っているように普段の振る舞いと比べるとおかしな行動であるとわかる。それに対しマムシュカが「恋をしたのよ」と言っていることから、この時点でタシロがマリッツァを気にし始めている証拠でもあると感じる。その後マニャに好きな人ができると言われ、マリッツァは一人屋敷に残ってしまう。授業中では貴族が身近にいなければ恋をしないだろうという考えで、占いを信じたくないのかと思ったが、無意識的にタシロが気になってしまったため、残ったのではないかとも考えられる。1 幕冒頭でチェッコとマムシュカがマニャの歌を聴いて女はいつだって誰かに聞いてもらうために歌うと言っているように、1 幕の最後でマリッツァがタシロの歌に入ってくるのはタシロに聞いて欲しいからであり、タシロのことが気になっているという

ことではないかと考えた。
二人を観察しているとどちらも 1 幕の時点では、上で書いたような場面で相手が気になりだし、最終的に相手に対して不満があるが気になるといった関係で終わっているものであった。そして 1 幕と 2 幕の間で少しずつその不満が薄れて、好意だけが残り、2 幕のような状態になったのだと結論づける。